

活格言語類型の論理¹

はじめに

この度中京大学にお招きいただき、お話をする機会を得ました。大変名誉なことと思っております。このような機会を与えてくださいました大学の当局、関係者の方々に感謝申し上げます。

お話し上げるのは、近年関心を持ち、少しく調べて整理致したことのある、内容的類型学についてであります。

§1 「内容的」という修飾語を付けない類型学は以前からあり、よく知られたものに孤立語、膠着語、屈折語のような類型に言語を分類するものがあります。しかしこれは孤立、膠着、屈折などにもいろいろな程度があり、また名詞と形容詞、名詞と動詞などでも異なっていることが多く、曖昧で分類する意味があるかどうかについて疑問がありました。しかし特に比較的最近、チョムスキーの「生成変形文法」が行き詰まりかけるにつれて、言語の研究の方法の一つとして、再び新しい角度から論議されるようになって参りました。この類型学の根元にあるのは、「言語的普遍」という考え方であったと思います。さらに「言語的普遍」というのは、人間の使う言語には、人間が使うという制約があり、したがってどのような言語をとってみても、そこには共通した何かがある、という考えに基づいているといえます。

このような考えは、古くから知られていましたが、より厳密なかたちでこれを表したのは、アメリカのグリーンバーグという学者でした²。言語的普遍には、例えば言語は必ず母音と子音を持っている、というように、すべての言語に妥当するような「法則性」もあり、これは「無制限な普遍性」*unrestricted universals* といわれています。これは言語を類型に分けるのに役には立ちません。これに対して「包含的普遍性」*implicational universals* というものがあります³。これは簡単にいえば、「ある言語が α というかたちを持っているれば、その言語は必ず β というかたちを持っているが、その逆は必ずしも正しくない」というものです。例えば日本語では名詞は「たち、など、等」のように、複数であることをはっきり示そうとする特別の場合を除いて、ふつう複数のかたちを持っていません。それでも場合によって単数のものを指すか、複数のものを示しているのか、おおよその判断は可能であって、日常的には不便を感じていません。ところが例えば英語の場合は複数

¹1997年11月19日、中京大学において行ったものである。

²Joseph H. Greenberg, *Language Universals, Current trends in linguistics*, Vol.III Theoretical Foundations, The Hague-Paris 1966, pp. 61-112.

³cf. William Croft, *Typology and Universals*, Cambridge Univ. Press 1990.

則として複数のかたちで表されます。しかし文法上複数のかたちだけあって、単数を示す形を持っていない言語は、知られていません。もちろん個々の言葉について見れば英語の *glasses* 「眼鏡」のように、複数のかたちしか持たないものはあります。これをグリーンバーグの定式に当てはめると、単数が α 、複数が β ということになります。

同じことは今度は「双数」というかたちについてもいうことができます。インド・ヨーロッパ諸語は、古い時代に「双数」という、特別のかたちを持っていたと考えられています。これは二つあるいは対になったものをあらわす場合に用いられるもので、例えばロシア語ですと、中世には *ruká* 「手」は「両手」のばあい *rucě* となりました。「机」は単数の時には *stolü* ですが、「二つの机」というときには *stola* となり、三つ以上の机になって初めて *stoly* < **stoli* のように、複数のかたちが現れます。双数のかたちを持っている言語は、インド・ヨーロッパ語の中だけでなく、それ以外にもたくさん知られていますが、みな複数も持っています。しかし逆に複数を持たないで双数を持っている言語は知られていません。したがってこの場合には、複数が α 、双数が β ということになります。

§2 これらの場合を通じていえるのは、 α に当たる言葉は β に当たる言葉に比べて、意味がより狭く、はっきりしていることです。これは日本語のように例外的に複数であらわすものを持っている場合でも同じで、例えば「大人」と「大人達」とを比べてみますと、「大人」というときは、単数のこともあり、複数のこともあります。反対に「大人達」というときには、これが単数を表すことはなく、複数に限られます。英語の場合にも、*the desk* 「机というものは」というように一般的な言い方をするときには、単数だけでなく、複数の机も指すことができます。代表単数などと言われているものがこれです。これは日本語の「たち」や英語の *desk-s* の [-s] が複数を表すことを示しているから当然のことですが、このように何かの特別な標識を持つかたちを、「有標的な」かたちといい、持たないものを「無標的な」かたちといいます。明らかなように、有標的なかたちは、 β に当たるものになります。

意味の上でも同じようなことがあり、例えば英語の場合、男性と女性についても、このことがいえます。たとえば *man* は主に男の人を指しますが、場合によっては女性を指すこともできます。逆に *woman* が男性を指すことはありません。したがって *man* は「無標的な」かたちであり、*woman* が「有標的な」かたちであるということができません。最近ではこれが男女差別につながるということで、男性と女性とに共通のかたちを用いることが多くなったことは、ご承知の通りであります。以前には「座長」は性別にかかわらず、*chairman* といっていました。これは比較的以前から *-man* の部分を *-person* にかえて、*chairperson* となりました。最近では *cameraman* の代わりに *cameraperson* という語も出てきています。

ついでにいえば、ロシア語の場合はやはりまだ男性上位であると思われるのですが、興味のあるのは、家畜の場合には昔から無標的なものが雌を指していることです。たとえば

koróva は「雌の牛」を指しますが、雌雄の別なく「牛」一般を指すことができます。これに対して「雄の牛」を指す byk は「雄」しか指しません。同じことが他の家畜にもいえます。ところが野獣の場合には有標的なのは雌であります。例えば volk 「狼、雄の狼」- volčikha 「雌の狼」など。そう考えてみると、英語で「牛」を意味する ox-cow のうち、無標的なのは「雌牛」を表す cow のようにも思われます。なぜならば、cow boy は別に「雌牛」ばかりを追っているわけではないと思われるからです。しかしこれは専門家の意見を聞いてみなければならぬことです。

以上述べてきたことから有標的なものが、無標的なものに比べて使われる頻度が少ないであろうということは、容易に想像がつかます。実際に調べてみてもそうであることが、報告されています。

ところでこのことが類型学にどういう意味を持っているかといえば、グリーンバーグは、「もし α ならば(があれば) β もあるが、その逆は必ずしも真でない」ということには、① α と β があるばあい、② α はあるが β はないばあい、③ α も β もないばあいが考えられるとしています。もう一つの組み合わせ、すなわち ④ α はあるが β がないばあいは仮定に反するので、問題にはならないこととなります⁴。

§3 この三つの分類によって言語を分類することができます。たとえば ① 複数も双数もある言語、② 複数はあるが双数はない言語、③ 複数も双数もない言語という分類がこれに当たります。

しかしこのような言語類型学は、言語を分類する基準が類型学自身の内部において見出されないという欠点を持っています。すなわち、ある現象をとらえて言語を分類しても、別の現象をとらえて分類した場合とは、同じ分類が得られることはありません。またそういう分類を行うことに何かの意味があるかといわれると、これも余りはっきりしたものにはなり得ません。

一方ロシアおよびソヴェト並びにその後のロシアにおいては、思考と言語の関係についての研究がいろいろと行われていました。これは一つには旧ロシア帝国の版図にあったコーカサスの言語の中には、インド・ヨーロッパ語の常識からは理解できないような現象を持ったさまざまな言語があったからでもありました。

このような研究の歴史は長いものでありましたし、またその間にはいろいろな紆余曲折がありました。しかし詳しい話は割愛して、その結果どういう知見が得られたかを中心に話したいと思います。

§4 このような研究の中で、言語の中心には主語・述語・目的語の関係の表現の仕方に、いくつかのパターンがあり、このパターンにしたがってそれぞれの言語の構造が決定

⁴J. H. Greenberg, *op. cit.*, p. 61.

されること、言い換えれば、この関係を一番基本的なものとして、言語の分類ができること、語彙、文法などのレヴェルのいろいろな現象が、この基本的な関係から論理的に説明できること、が次第にわかってきました。これが内容的類型学の基本的な命題であります。

話を簡単にするために、認識されることが歴史的にはもっとも遅かった「活格言語類型」active language type と、インド・ヨーロッパ型の「対格言語類型」についてみていくことにしましょう。英語、ロシア語のような、インド・ヨーロッパの言語(これを印欧語派といます)には、ご承知のように動詞に他動詞と自動詞の区別があります。他動詞というのは、ふつう主語の行為が何かの対象に及ぶ場合であると、説明されているものです。この行為を及ぼされる対象はふつう対格とか目的格とかいわれ、主語を表す主格とは異なった格であると考えられています。

英語の場合には主格のかたちと目的語のかたちは名詞では同じですが、人称代名詞の場合には例えば I — me, he — him, she — her のように異なっており、また他動詞の場合には目的語となる名詞を示さなければ、完全な意味をなさないということになっています。ギリシア語、ラテン語、ロシア語などの、まだ格の形を持っている言語では、主格と対格は明らかに異なった形をとります。私たちは中学に入って英語を学んだ際に、自動詞と他動詞の区別があること、他動詞には目的語がいることをたたき込まれました。その結果、それが当然であり、どの言語にも必ずある、普遍的な現象なのだと感じるようになっていきました。

§5 ところがアメリカ・インディアンの多くの諸言語、パプア・ニューギニアの言語、オーストラリアのアボリジンの言語等々、さまざまな言語においては、必ずしもこのことが常識ではないということが、わかってきました。この種の言語を「活格言語」といい、これらの言語の中にもいろいろな発達の段階があることが後にわかってくるのですが、これらの言語にはまず、他動詞と自動詞の区別がありません。そのかわり「生き物」(生物)に関係する動詞 active verbs と「もの」(無生物)に関係する動詞 inactive verbs が区別されます。「生き物」に属するものは、言語によって違いがあり、ある言語では人と動物と植物が属していますが、ある言語では植物はものの中に入れてあります。この後のばあいには「活動体」と「不活動体」というようにして、「生物」・「無生物」の分類とは区別できます。

活動体あるいは生物に属するものと関係する動詞の類には、自動詞や状態動詞のほかに、他動詞も含まれます。これはこれに属するものが行為を他に及ぼすことができることから当然と考えられます。これに対して行為を他に及ぼしたり、行為を行ったりできない無生物の場合には、状態を表すことしかできません。従って生物に関係する動詞の類では、他動詞と自動詞の区別は、原則としてないことになります。例えば「死ぬ」と「殺す」、「燃える」と「焼く」、「乾く」と「乾かす」、「横たわっている」と「置く」、「目覚める」と「起こす」、「倒れる」と「倒す」、「行く」と「運ぶ」、「走る」と「追いかける」、「這う」

と「引きずる」などがこれに属するとされます⁵。したがってこの種の言語では「ある」と「持つ」の区別もありません。また無生物に関係する動詞は、状態動詞であります。これには英語などでは be 動詞と形容詞とで表される、「大きい」とか「高い」とか「老いている」のようなものも含まれます。したがって、英語に見られるような連辞も、独立の品詞としての形容詞も、また存在しないことになります⁶。

§6 更に興味のあるのは、植物が人や動物と同じ語彙によって示され、植物に可能な述語が、人や動物と共通していることが、報告されていることです。クリモフによれば、これに属するのは、例えば「生まれる」、「死ぬ」、「育つ」、「痛む」、「引っ搔く」、「つかむ」、「引っ張る」、「立つ」、「横たわる」、「坐る」、「飲む」、「泣く」(樹脂が滴る)、「ピーピーいう」、「呻く」、「立ち上がる」、「傾く」、「運ぶ」(葉を付ける)、「持ってくる」(果実を付ける)、「這う」などがこれであるということです⁷。

これに対応するのは、論理的には同じ行為あるいは状態であるはずのものが、生物に関連するか、無生物に関連するかによって、異なる語彙によって実現されることです。これに属するのは、たとえば「倒れる」、「横たわる」、「吹く」、「泳ぐ」(流れていく)、「沈む」、「行く」(時間が過ぎる)、「黙る」(静かである)、「若い」(新しい)、「老いている」(古い)などであるといえます。たとえばナヴァホの言語では、*tí* 「(人、動物が)いる」— *téí* 「(ものが)ある」、*tí'* 「(人、動物が)横になっている」— *'á* 「(ものが)横たわっている」、*-hááh, -ya* 「(人、動物が)動く」— *kéés* 「(ものが)動く」、*yóól* 「(人、動物が)吹く」— *t'síih* 「(風が)吹く」などが、これであるということです⁸。

§7 名詞の場合にも、性は生物性と無生物性、あるいは活動体性と不活動体性の二つということになります。そして生物性あるいは活動体性は、行為者を表す有標的な格である活格と、目的語を表す無標的な格である、不活格(絶対格)の二つをもつことができますが、無生物性あるいは不活動体は、行為者になることはできないので、無標的な不活格(絶対格)しかとることができません。

面白いことに、自動詞の意味上の主語も、絶対格をとるのが原則です。そうでなければ無生物性が主語になることはできなくなるでしょう。このことと、さきに述べた原則、すなわちこの種の言語には他動詞と自動詞の区別は存在せず、あるのは生物に関わるか、無生物に関わるかの区別だけであるという原則とが組み合わせされると、極めて興味ある特徴が浮かんできます。たとえば「鹿」の絶対格と「死ぬ」という動詞があれば、「鹿」は主語

⁵Г. А. Климов, *Типология языков активного строя*, Москва 1977, ст. 85. 『活格言語の類型学』。著者のクリモフ (G. A. Klimov 1928–1997) は内容的類型学を組織立てて集大成した学者。

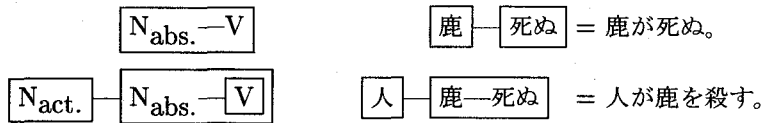
⁶Г. А. Климов, *op. cit.*, p. 86.

⁷Г. А. Климов, *op. cit.*, p. 96.

⁸Г. А. Климов, *op. cit.*, p. 114.

となって「鹿が死ぬ」という意味になり、これに「ひと」の活格が付け加えられると「鹿」は目的語と見なされて「人が鹿を殺す」という意味になります。このように、同じ絶対格が主語になったり、目的語になったりするということは、主格と目的格が異なることを原則とする対格言語の論理からは、理解することが難しかったのです。これが、活格言語あるいは能格言語の構造を理解することを長いこと妨げた、原因だったのです。

いま、N を名詞、V を動詞とし、活格を active case、絶対格を absolute case とすれば、これは次の図で示すようなものになります。



§8 このことから、私たちが当然と考えてきた動詞の他動詞と自動詞の区別、あるいは主格と目的格の区別というのは、実は対格言語にのみ通用するものであることが、わかってきました。これらは決してすべての言語に妥当する普遍的なものではなかったのです。

いま、自動詞的な述語(これを2項述語といいます)の主語を S(Subject)、他動詞的な述語(3項述語)の主語を A(Actor)、目的語を O(Object) または P(Patient) のように表しますと、活格言語と対格言語との関係はおおよそ次のようになると考えられます。

対格言語では、インド・ヨーロッパ語に見られるように動詞は主語と文法的に一致し、目的語と一致することはありませんが、活格言語の場合には原則として絶対格に立つ名詞と文法的に一致し、言語によっては更に活格に立つ名詞と二次的な文法的な一致を行うことになります。

	A	S	O(P)
(活格言語)	活格	絶対格	
(対格言語)	主格		目的格

§9 このような文法的な一致は、原則として接辞によって行われます。接辞には活格系列と絶対格系列の二つの系列を持つものと、その中間にあると考えられる情緒系列をこれに加えた三系列を持つものがあるといわれています。

典型的な系列を持つものとしてクリモフが挙げているものの中から、アメリカ・インディアンの言語のヌー族の言語の一つであるダコタの系列を挙げますと、次のようになります⁹。

	活格系列	絶対格系列
1単	wa-	ma-, m(i)
2単	ya-	n(i)-, n-
3単	∅-	∅-
1複(包含形)	u ⁿ -	u ⁿ -
1複(非包含形)	wa-	ma-, m(i)-
2複	ya-	n(i)-
3複	∅-	∅-

ここで「包含形」inclusive form というのは、1人称複数で聞き手を含める場合、「非包含形」exclusive form は聞き手を含めない場合です。これは活格言語が行為者(活格)と非行為者(絶対格)を区別するために、必然的に必要とされるカテゴリーであると考えられます。

たとえば、このダコタの言語では、wa-ti「私は住んでいる」、wa-∅-kaška「私は(彼を)縛る」、ma-∅-kaška「私を(彼が)縛る」、ma-ya-kaška「私をおまえは縛る」、ma-ṭa「私は死ぬ」、ma-wašte「私は善良だ」のようになるといいます¹⁰。

前にいいましたように、動詞述語がいつも絶対格に立つ名詞と文法的な一致をすることは、この二つが極めて密接に関連していたことを表しています。よく考えて見れば、例えば「鹿が死ぬ」という場合には「死ぬ」という過程が鹿のからだに起こることを示しています。したがって「鹿」がもしいなければ、「鹿が死ぬ」ということは起こり得ないでしょう。同じように、「人が鹿を殺す」という場合にも、もし「鹿」がいなければ「人」がいたとしても、「殺す」という行為は成り立ちません。「鹿」が「死ぬ」ということがあり、「鹿が死ぬ」のが「人」のせいだと認められるときに、初めて「人が鹿を殺す」といえるのです。

そうとすれば、「死ぬ」あるいは「殺す」が絶対格と密接な関係を持ち、これと文法的に一致するということが極めて自然なことだといえます。「人」が「行為者」であるかないかは、偏に認定の問題なのです。もし呪いが有効だとする文化を持つ社会だとしたら、鹿の死ぬ場所にいない人でも、行為者と認められる可能性があります。そういう社会であったら、アリバイは有効ではないのです。もしそうとすれば、動詞が常に行為者と文法的に一致する方が事態を正しく反映してはいない、ということになります。

§10 対格言語のばあい、自動詞の主語も他動詞の主語も同じ主格で表されます。したがって主語は行為者とは限りません。行為を受けてもよいのです。そういう構造を持つ言語ならば、動詞に名詞を取り替えたという標識をつけて、主格に立つ名詞を取り替えても問題が起こりません。しかし活格言語は他動詞の主語になる活格は行為者しか表しませんから、

⁹Г. А. Климов, *op. cit.*, p. 134.

¹⁰Г. А. Климов, *op. cit.*, p. 58.

これを絶対格に立つ名詞に変えることはできません。活格あるいはこれと同じような文章構造を持つ能格言語のばあいには受動構文がないことは、こうして見れば当然のことですが、これらの言語を作っている論理が対格言語の論理とは異なるということが分からなかったために、このことはなかなか理解できず、長い間様々に議論が重ねられてきました。

これと関連していわゆるピヴォットといわれる現象の特異性も、理解できるようになりました¹¹。対格言語ではたとえば ① *Mary slapped Diana, and Mary ran away.* 「メアリーがダイアナをたたいた。そしてメアリーが逃げていった」という文章があるとすれば、後の方のメアリーは省略できます。② *Mary slapped Diana and ran away.* 「メアリーがダイアナをたたいて逃げていった」というのは、正しい文です。ところが活格言語では ② の文は正しい文章ではないのです。この種の言語で ② のような文章があったとすれば、「逃げた」のは「ダイアナ」でなければならないのです。

§11 この理由は次のように考えられています。① の文は、活格言語の格関係で見れば次のようになります。

①' *Mary₁(A) slapped Diana(P), and Mary₂(S) ran away.*

このばあい、*Mary₁* と *Mary₂* とは *A* と *S* の関係にありますから、さきに述べたように、対格言語では同じ主格によって表されます。したがって対格言語ならば *Mary₂* は省略することができます。しかし活格言語では *Mary₁* は活格、*Mary₂* は絶対格ですから、これを省略すると非文になります。省略できるのは次の ③ の文における

③ *Mary(A) slapped Diana₁(P), and Diana₂(S) ran away.*

Diana₂(S) の場合だけなのです。

§12 それでは対格言語では ③ の文の *Diana₂(S)* は絶対に省略できないのか、といえ、そういうことはありません。前半の部分を受動文にすることによって十分可能になります。すなわち、

③' *Diana₁(S) was slapped by Mary, and (Diana₂(S)) ran away.*

この場合には *Diana* はいずれも *S* となって主格の扱いを受けます。同様にして活格言語のばあいにも、① のようなばあいにも、形式的受け身によく似た形 (*antipassive*) を使って省略が可能になります。

オーストラリア東北部のアボリジンの言語の一つであるワロゴ語では、上述の英語の例示に平行する、次のような文が見られるといえます¹²。

¹¹ 山口巖 『類型学序説』1995, pp. 56-59.

¹² 角田太作 「能格言語と対格言語におけるトピック性」『言語研究』vol. 90, 1986, p. 149 & seq.

- ④ pama+ \emptyset yani+ \emptyset warrngu+ngku [pama+ \emptyset] palka+lku.
 「男絶 行く過/現 女能 男絶 殴る目的」
 = 男(S)が行って、女(A)その男(P)を殴った」
- ⑤ warrngu+ngku pama+ \emptyset palka+n [pama+ \emptyset] yani+yal.
 「女能 男絶 殴る現/過 [男絶] 行く目的」
 = 「女(A)が男(P)を殴って、その男(S)が行った」
- ⑥' *pama+ \emptyset yani+ \emptyset [pama+ngku] warrngu+ \emptyset palka+lku.
 「男絶 行く過/現 [男能] 女絶 殴る目的」
 = * 「男(S)が行って、男(A)が女(P)を殴った」

ここで*がついているのは非文である。また動詞に「目的」と表示されているのは、従文において目的、結果、次に起こった行為などを示す、目的形である。

§13 次の文がいわゆる antipassive の構文です。

- ⑥ pama+ \emptyset yani+ \emptyset [pama+ \emptyset] warrngu+wu palka+kari+yal.
 「男絶 行く過/現 [男絶] 女与 殴る逆受身・目的」
 = 「男(S)が行って、男(dS)が女(D)を殴った」

ここでdSというのは、antipassiveの標識であります。これは対格言語において受動の標識を動詞に付加することによって対格が主格に変換される($P \rightarrow S$)のと同じように、活格言語において活格が絶対格に変換される($A \rightarrow S$)ことを示す標識です。このときもとのP(女)はPに留まることができないので(なぜならもし留まったら「男」はSではなく、Aすなわち活格にならなければならない)、クリモフが仮に与格と呼んでいる形に変えられます。このことから、いわゆる「逆受身」antipassiveが受身とは直接関係がないことが分ります。

§14 これらのことからまた、主格・対格などという格組織や、能動・受動という「態」あるいは「相」voiceの対立も、決して普遍的なものではなく、対格言語にのみ特徴的なものであるということになります。しかしこのことから、直ちにこの種の言語に「格」がないということにはならないように、「相」もまた存在しないということにはなりません。

対格言語における相を考えて見れば、その特徴は「現実には同じ事態であるものを、言語の上だけで異なった表現を文法的に行うこと」といってもよいでしょう。たとえば「人が鹿を殺す」というのも、「鹿が人に殺される」というのも、現実には同じことです。活格言語においては能動・受動の区別はありませんが、今いった定義に当たるものとして、アメリカ・インディアンの言語にしばしば見られるという、version というものがあります。

これは「求心相」centripetal version/introvert contrast と「遠心相」centrifugal version/extrovert contrast あるいは「非求心相」からなるといわれ、「求心相」が原則として有標的なものであるといわれます¹³。例えば「殺す」、「燃える」、「導く」、「引きずる」、「起こす」、「乾かす」のようなものに対して「死ぬ」、「燃える」、「行く」、「這う」、「起きる」、「乾く」などは求心相に属していることとなります。非求心相は無標的でありますから、「殺す」は「死ぬ」も意味することができますが、求心相の「死ぬ」は「殺す」を意味することはないということとなります。なぜこれが相の定義に合致しているかといえ、対格言語の場合には「死ぬ」と「殺す」とは明らかに異なった現実の事態といえますが、原則的に他動・自動の区別のないこの種の言語の担い手たちにとっては、「死ぬ」と「殺す」とは同じ現実を指しているといえます。したがって求心相と非求心相、あるいは遠心相は同じ現実を言語的に異なった文法手段によって表現しているに過ぎないこととなります。たとえばナヴァホの言語では *yì-bééz* 「未完了-沸く」 > 「それが沸いている」に対する *yì-l-bééz* 「未完了-遠心-沸く」 > 「彼はそれを沸かしている」となります。

§15 他方北アメリカにあるインディアンの言語の一つ、ネズ・パース語の場合、目的語を特定のものとして表すか、あるいは不定のものとして表すかを示す、動詞の形式があるといわれます¹⁴。たとえば、

⑦ *ä sikäm-na a-npisa* 「お前 + 馬不定 + 3人称-とる不定」
= 「お前は(不定の)馬をとる」

⑧ *ä sikäm a-npaysa* 「お前 + 馬 + 3人称-とる定」
= 「お前は彼の馬をとる」

このばあい、⑦の接辞 *-na* は対象が不定であることを表し、馬の帰属については明示されていません。したがって述語「とる」に付加された3人称の接辞は、「馬、それをとる」という意味となり、「馬」を指すこととなります。これに対して⑧では、述語「とる」が定性を表すために「馬」には *-na* はついていません。そうすると3人称接辞は「馬」を指すのでなくて、「馬」の帰属、すなわちそれが「彼の馬」であることを示すこととなります。このような接辞の解釈の変更は、客観的現実の事態を変更するものではありません。したがってこれもまた相の定義に反するものではないこととなります。このように述語が目的語の定性と不定性を示すばあいは、ネネツ語その他に見られるということであり¹⁵。これらのことから、相を能動・受動に限るのは対格言語の枠内でのみ可能なことであり、相にはいろいろな種類があり得ることが分ってきます。このために近年では従来

¹³Г. А. Климов, *op. cit.*, pp. 139-144.

¹⁴山口巖 *op. cit.*, p. 76.

¹⁵И. И. Мещанинов, *Глагол*, Л. 1982, pp. 118 & seq. メシジャーノフ『動詞』。

相を表すのに用いられてきた залог という用語を専ら対格言語に限り、相一般を指すときには диатеза (diathesis) を用いるようになってきています。

§16 インド・ヨーロッパ語はこの活格言語類型から発達してきたという仮説がいま比較言語学のなかで提出され、かなり有力なものと考えられています。もしこれに従ってインド・ヨーロッパ語は活格言語類型から発達のものであるとし、また相を求心相・遠心相(非求心相)であるとしたならば、いわゆる中動相の問題が理論的に解決されるように思われます。

インド・ヨーロッパ語は、そのもっとも古い文献のひとつである、インドのヴェーダや、イランのガーサーの言語、ホメーロスのギリシア語や古典ギリシア語、あるいはまた古い形を残しているスラヴ語など、またインド・ヨーロッパ語がまだ分化しなかった頃に分かれたと信じられているヒッタイト語やこれに属するアナトリア語などをみれば、すでに対格言語の特徴を持って現れています。中動相というのは、これら古い段階の言語に見られるもので、たとえばギリシア語の λúō λúω 「洗う」に対する λúomai λúoμαι 「自分の体を洗う」のように、能動相と受動相の中間をなすものと考えられて、中動相 medium という名を与えられ、あるいは梵語では伝統的に parasmāi-pada (他人のための・ことば)「為他言」に対する ātmane-pada (自分のための・ことば)「為自言」と名付けられています。いわゆる純粋な受動相はひとかたまりの変化ではなく、存在動詞 + 受動分詞という形で用いられることが多く、その当初には、まだ充分に発達していたとは考えられないのが実状でありました。したがって能動相・中動相という対立が、本来のものであったと考えられますが、不思議なことに歴史時代に入って、この中動相ほどの言語においても急速に衰退し、やがて消滅して受動相にとって代わられてしまいます。

もし能動相と中動相の対立が古い時代の動詞の変化の中軸であったとすれば、それはどうしてであったのか、またそのように重要な対立が歴史時代にどうして急速に衰退してしまったのかは、謎でありました。しかしさきに述べましたように、インド・ヨーロッパ語が活格言語から変化したものだと仮定しますと、このことには一応の説明が付きまします。

すなわち、インド・ヨーロッパ語の能動相と中動相は、活格言語の遠心相と求心相を受け継いだものと考えられるのです。活格言語の段階ではさきにいいましたように、自動と他動の区別はありませんでしたから、例えば「死ぬ」と「殺す」、「燃える」と「焼く」は現実には同じ事態と考えられ、同じ動詞で表されていました。しかし何かの事情で「死ぬ」と「殺す」を使い分けしようとしたとき、「死ぬ」は求心相で表すということがあったと考えられます。しかしこのばあい現実の事態は同じですから、この二つの違いは、ちょうど私たちが「A が B を殺した」といっても、「B が A に殺された」といっても、現実の事態には違いがないと考えるように、活格言語を話す人にとっては、たとえば「A が B 死ぬ」といっても、「B 死ぬ・求心相」といっても、事態は同じであったと考えられていたに違いありません。しかし言語が発達して対格言語になり、自動詞と他動詞が違う現実の事態

をあらわすと考えられるようになると、「死ぬ」と「殺す」は全く異なったものとなってしまいます。中動相が独立した文法のカテゴリーとなることをやめ、能動と受動の対立が急速に発達してきた理由が、このようなところにあつたと考えれば、よく説明することができます。

§17 以上述べてきたのは、動詞が活格系列と絶対格系列という、二つの系列の接辞を持っているばあいですが、たとえばスー族のアシニボインの言語、イロクオイ族のセネカの言語のように、言語によってはもう一つ「情緒系列」といわれる系列の接辞を持っているという報告があります。これは典型的な行為動詞に比べれば、活性名詞と関わりの深い状態動詞や、不随意的な行為を表すものは、一般の状態動詞と行為動詞の間にあるものと考えることができます。たとえばアルゴンキン語族に属するオジブワ語 Ojibwa では、ke-nōntō-n 「お前を・聞く・私は」 = 「私はお前のいうことを聞く」に対して、情緒構文では ne-nōntuw-ā 「私に・聞こえる・彼が」 = 「彼のいうことが私に聞こえる」、ke-nōntuw-ā 「お前に・聞こえる・彼が」、u-nōntuw-ā 「彼に・聞こえる・彼が」などとなるといいます。ここでは「聞く」主体と「話す」主体(客体)の位置関係が逆になっています。アメリカの言語学では、この構文は「他動詞」を述語とする構文の一種で、倒置を伴うものと考えられているということです¹⁶。特に興味のあるのは、このカテゴリーを持つ言語を通じて、この類に属する動詞の意味に大きな共通性があることです。すなわち、たとえば「見る」、「聞く」、「知る」、「覚えている」、「忘れる」、「気に入る」、「愛する」、「欲する」、「必要とする」、「憎む」、「恐れる」、「そねむ」、「憐れむ」、「笑う」、「考える」、「見える」、「似合う」などがこれに入るといいます。たとえばインド・ヨーロッパ語の場合、例えばラテン語ではこれらの動詞は「形式所相動詞」deponentia であらわすもの、完了形で表すもの、のように、ほかの動詞と異なった振る舞いをするものが多くあります。形式所相動詞というのは、意味は能動なのに、形は受動形 — 正確には古い中動相の形 — をとるものです。またラテン語で現在形は他と異ならないが、完了形で受動の形を取るものを半形式所相動詞 semideponentia といいます。ギリシア語のばあい未来形などで中動相の形を取るものや、完了形で中動の形をとるものの外、完了形が現在の意味を持つものがあります。

たとえば、

¹⁶山口巖 *op. cit.*, p. 67, p. 100 etc. ; Г. А. Климов, *op. cit.*, pp. 96-97 etc.

「意味」	ラテン語		ギリシア語		
	現在	完了その他	現在	未来	完了その他
見る	video		δέρχομαι		
聞く	audio		ἀκούω	f. ἀκούσομαι	
知る		novī			οἶδα
覚えている		meminī	μιμνήσχομαι		μεμνήμαι
忘れる	obliviscor				
気に入る	licet				
愛する			ἔραμαι		
欲する			βούλομαι		
必要とする			δεόμαι		
憎む	ulciscor	odī	ἄχθομαι		δέδοικα
恐れる	vereor		φοβέομαι		
そねむ					
憐れむ	misereor				
笑う			γελάω	γελάσομαι	
考える	opinor		οἶομαι	ἐν-νοέσομαι	
見える	videor		ᾔοικα		
似合う	mereor				

ロシア語では例えば бояться「恐れる」は再帰の接尾要素 ся なしに単独で боять が用いられることはありません。専門家でないので分かりませんが、日本語ではこれに属すると思われる語彙に、対象を「が」で表すものが多く見られます。たとえば「お金が好き」、「あの人が嫌い」、「犬が怖い」「あの子がかawaiiそう」、「お嫁さんがほしい」、「お土産が気に入る」、「花がほしい」、「教科書がいる」などです。これは全くの偶然でしょうか。

§18 もう一つ活格言語において特徴的なのは、「有機的所有」organic possession と「非有機的所有」inorganic possession と呼ばれているものがあることです。有機的所有というのは、ある対象とその所有者とが、分けることができない関係にあるもので、非有機的所有というのは、分けることができるものです。

有機的所有に属するものは3つの種類に分けられるといます。

- (1) 人あるいは動物、植物の体の部分の名前、及び、容器、かごのようなもの。
- (2) 親族の呼び名。
- (3) 人間や動物と切っても切れない関係にあるもの。たとえば「名前」、「影」、「足跡」、

「夢」、「矢」、「煙管」、「家」、「獲物」、「巢穴」、「餌」など。

これらの有機的所有に属するものは、人称を表す接辞なしでは、原則として使うことがありません。

この場合、接辞として用いられるのは、絶対格に用いられる系列であるといわれているのは、興味のあることといえます。これに対して非有機的所有をあらわす場合は、人称接辞と他の要素を組み合わせた複雑な構成を持つか、情緒系列の接辞を用いるといえます。たとえばアタバスカン語族のチリカファの言語では bi-tsii といえば「彼(自身)の頭」となりますが、bi-'i-tsii といえば、「彼の(食料としての)頭」ということになるそうです。ダコタの言語でも mi-taⁿca、ni-siha といえば「わたしのからだ」、「お前の足」のようになりますが、mi-ta-koda、ni-tacuⁿke といえば、「わたしの友人」、「お前の馬」のようになりますといえます¹⁷。

しかしこれを「所有」という名で呼ぶのは適当ではありません。なぜならば、「所有」というのは「所有者」と「所有されるもの」との関係でありますから、この関係が成り立つためには、他動詞と自動詞の区別がなければなりません。ところが、これまで述べてきましたように、活格言語はこの区別を知りません。そうすれば接辞と接辞を付けられたものとの関係は、所有関係ではあり得ないことになります。事実名詞の所有格、あるいは属格といわれているものは、対格言語の段階になって初めて発生したと考えられています。ここからクリモフはこの関係を一種の「同格関係」と考えているようです¹⁸。つまり、bi-tsii は「かれ」＝「頭」なのです。そうすれば非有機的所有の接辞として別の要素を組み合わせたり、情緒系列の接辞を用いたりすることも、よく説明できます。「彼と関係のある」というほどの意味を持つと考えられるからです。(cf. Ojibwa 語の ne-nōntuw-ā「彼のいうことが私に聞こえる」)

一方有機的所有の場合に絶対格系列の指標を用いることについても、説明ができると思われれます。メシチャニーノフは、彼の名著『動詞』において、ネネツ語の例を挙げています。それによれば、ネネツ語では本来の名詞も、形容詞も、動詞も皆人称語尾をとって述語となるとされています。言い換えれば、これらすべては品詞の区別ではなく、同じように動詞として扱われているということが出来ます。たとえば¹⁹、

nu-m	「私は立つ」	ngarka-m	「私は大きい」
nu-n	「おまえは立つ」	ngarka-n	「おまえは大きい」
nu	「彼は立つ」	ngarka	「彼は大きい」

¹⁷Г. А. Климов, *op. cit.*, pp. 148–150.

¹⁸Г. А. Климов, *op. cit.*, pp. 151–157.

¹⁹И. И. Мещанинов, *op. cit.*, p. 45.

hasaβa-m	「私は男だ」
hasaβa-n	「おまえは男だ」
hasaβa	「彼は男だ」

以上で活格言語という類型が、対格言語とは全く異なった論理をもって言語の構造を作っていることが明らかになったと思います。この言語はコーカサスに広く分布している「能格言語類型」に属する言語に発展し、あるいはインド・ヨーロッパ語のように直接に対格言語に発展したと考えられていますが、その発展の道程には極めて長い時間が必要であったと思われます。現在同じ言語の歴史の上で、異なった類型に発展した例は知られていません。しかし言語の発展は連続的でありますから、先に見ましたように、ギリシア語やラテン語などに、対格言語の論理では理解できず、能格言語や活格言語の論理からなら説明できるような現象が、そこかしこに残っており、やがて消えていきました。これらは「随件事象」とよんでいます。これらの随件事象の存在によって、現在の類型が、どのような類型から発展してきたかが推定できます。これに対して主語・述語・目的語のあり方から論理的に説明できるものを、「包含事象」といいます。言語の類型の発展が、このように長い時間をかけて行われると考えられますので、文字のない時代の状況を研究できる比較言語学が、最近再び脚光を浴びて来つつあります。私たちが当然と考えてきた色々な現象が、実は決して言語一般に通用する普遍的なものではないことが、類型学の研究の進展と共に、ますます明らかになってきています。

ところで活格言語に随件事象がないかといえば、実は色々あります。そのなかで目に付くものを一つ挙げますと、動詞が目的語の性格によって異なる形を取るというものがあります。たとえばエビングという学者の報告によれば、アイマラ語という言語においては、「運ぶ」、「置く」、「取る」という動詞が、意味上の目的語となる対象の性質によって、右のような形を取るといわれます²⁰。

運ぶ	取る	置く	意味
irpaña	irptaña	irpxtaña	活動体
ičuña	ičtaña	ičxataña	細かいもの
ajaña	ajtaña	ajxtaña	長いもの
iraña	irtaña	irxataña	丸いもの
asaña	astaña	asxataña	平たいもの
apaña	aptaña	apxataña	不規則な形のもの
itaña	ittaña	itxataña	重いもの
iqaña	iqtaña	iqxataña	柔らかいもの

²⁰ 山口巖 *op. cit.*, p. 93; Г. А. Климов, *op. cit.*, p. 280; J. E. Ebbing, *Gramatica y diccionario Aimara, La Paz (Bolivia) 1965*, p. 245.

このような状況はアフリカのバントゥー諸語のような、「多分類言語」を思わせます。バントゥー語の中で比較的良好に知られているスワヒリ語の場合をみてみますと、これは11の類に分かれるといわれます²¹。

単 数			複 数			ク ラ ス
	名 詞	動 詞		名 詞	動 詞	
1	m(u)-, mw-	*	2	wa-	*	人
3	m(u)-, mw-	u-	4	mi-	i-	植物
5	j(i)-, ø-	li-	6	ma-	ya-	丸いもの
7	ki-	ki-	8	vi-	vi-	もの
9	n(y)-, ø-	i-	10	n(y)-, ø-	zi-	動物
11	u-	u-	-	-	-	抽象名詞

§19 スワヒリ語において、このような分類にはすでにいくらかの崩れが見られてるといわれます²²。

その一つは人、あるいは動物が、それが所属する名詞の類の接頭辞はとるが、動詞の一致は第一類、又は複数の場合には第二類に従うというものです。たとえば、

- a. Ki-jana m-refu w-a Nigeria a-li-sema...
 = a-youth 1class-tall 1class-of Nigeria he-past-read...
 = ナイジェリアの背の高い若者が読んだ...

ここで kijana は 第7類の ki類に属しています。これは基本的には物のクラスであります。他のクラスのもがこのクラスの接頭辞をとると指小辞になります。したがって本来ならばこれは *Ki-jana ki-refu ch-a Nigeria ki-li-soma のようにならなければならないはずですが。しかし現在の文法では所有形容詞のそれに準じるいくつかの場合を除けば、このような一致はすでに失われて、人のクラスの接辞をとるようになっています。

第二の崩れ方は、本来のクラスの接辞は付けたままで、その前に第一類あるいは第二類の接辞を重ねるやり方です。たとえば、

- b. M-ndege huyu a-li-ruka hewa-ni = 1class-9class-bird this 3pl-past-jump air-loc.
 = 鳥が空中に飛びあがった。

第三の方法はクラスの接辞そのものを第一類に変えてしまうものであります。たとえば、ki-ongozi「案内人」を mw-ongozi/wa-ongozi のようにする場合である。このようなことを考え合わせると、活格言語はそれ以前の多分類言語の多くのクラスを生き物とそれ以外の物に統合することによって成立したものではないかという考えが、信憑性を持ってきます。この点に関連して、今バントゥー語族の比較言語学的研究が盛んに行われています。

²¹ 山口巖, *op. cit.*, p. 113; G. A. Klimov, *op. cit.*, pp. 282-285.

²² 山口巖, *op. cit.*, p. 114.